

創刊に寄せて

この春、有志の者が集まって設立した《ギリシア語・文学研究会》は、七月にその第一回の研究発表会を催し、今ここに機関誌『プロビレア』の創刊号を発行する運びになりました。御同慶の至りであります。

今のところ会員数二十数名のまことにささやかな会ではありますが、関東、関西在住の方々参加をもえましたことは心強いかぎりでありまして、少数とはいえ、ギリシア語・ギリシア文学を愛する同好の人たちの集いとして、本会の実りある将来を期待したいものであります。

今から二十年余り以前に、私はアテネ大学の言語学研究室で、主任教授のクルムーリス教授にお会いして、ギリシアの《言語問題》についての意見を伺ったことがあります。そのときクルムーリス教授は「ギリシア語は一つである」ことをしきりに力説されました。純正語、民衆語の可否、優劣についての私の質問に対する答えであったと思いますが、三千年の歴史をもつギリシア語は、時代やジャンルやスタイルを越えてその全体が《一つの言語》であることを強調されたのだと思います。

また『中世および近代ギリシア語』（ロンドン、1969年発行）の著者ロバート・ブラウニング氏は、その著書の緒言の中で次のように述べておられます。

「……とくに強調しておかねばならないのは、ギリシア語は一つの言語であって、別個の幾つかの言語の連続ではないということである。人がギリシア語を学ぼうと思うとき、ホメロスから始めようと、あるいはプラトーン、新約聖書、ディゲニス・アクリータス物語、さらにはカザンツァークスから始めようと、一向に構わないのである。一旦、或る言語段階にしっかり根をおろして学ぶならば、その前のあるいは後の段階にとりくむためにさほど大きい努力を必要としないからである。教養あるギリシア人は、その時代までのギリシア語全体をつねに心に留め、それを利用し、それにそれとなく言及し、意識的にそれに修正を加えてきた。この知的連続性が、ギリシア語の研究を報いあるものとすると同時に、困難にもしているのである」と。

ギリシア語は三千年にも余る長い歴史をもつ言語であり、それは同じく長い歴史をもつ素晴らしい文学を生んできました。われわれが興味をもつのはこの壮大な言語と文学の殿堂であり、われわれはその華麗な殿堂の門にたたずみ、その扉を叩こうとしているのであります。われわれは力を尽くしてこの殿堂の片鱗になりとふれ、その内陣に分け入りたいと願うのであります。

本誌が、ギリシア語・ギリシア文学についてのわれわれの研究の成果のみならず、翻訳、紀行文その他、ギリシアの言語と文学を生みだした人びとの生活や風物などの

観察報告などをもとり入れ、お互いの切磋琢磨と交流親睦の場となることを念願して
やみません。

1989年11月

至本閣